

糸に歯牙のない点などはアサツキに似ている。しかし花茎は葉束と基部から離れていて花数が少く、花は白っぽく、花被片はより短瀾で先端は短かく尖るのでアサツキとはっきり区別される。その染色体数は $2n=16$ であることが黒沢幸子博士によって確認された。新種と考えられるので **イズアサツキ** と名付けて発表する。本植物を研究する機会を与えて下さった生物学御研究所の方々に深謝する。

○南九州産タヌキノショクダイ属 2 種 (新 敏夫) Toshio SHIN: Two species of the genus *Gladiocharis* (Burmanniaceae) from southern Kyushu

タヌキノショクダイ属 (*Gladiocharis*) はヒナノジャクジョウ科 (Burmanniaceae) の帯白色の腐生植物で Brazil の Rio de Janeiro で唯一度一ヶ所で発見された植物について *Gladiocharis macahensis* として発表された一属一種の植物であった。

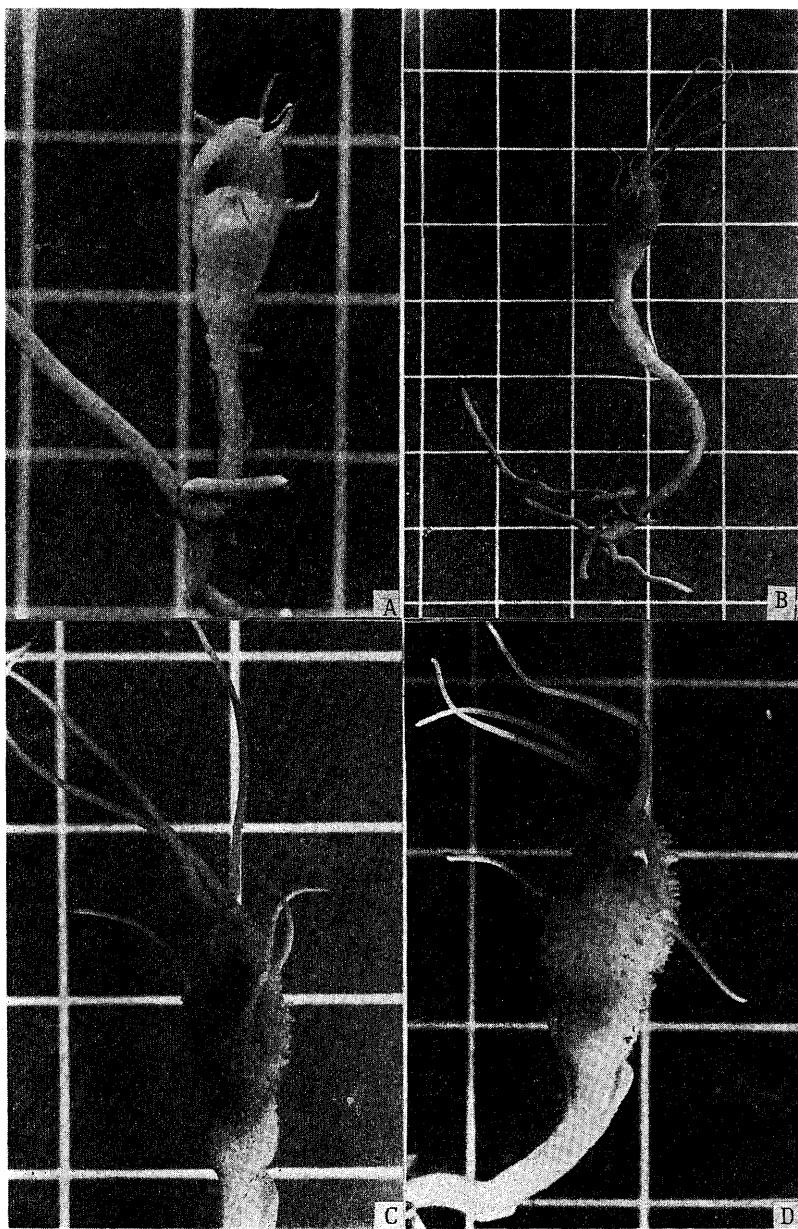
昭和 18 年 6 月 21 日、阿部近一氏が徳島県那賀郡大龍寺山麓の龍の岩屋で陸産貝採集中、同属のもの 1 個発見され、そのスケッチが阿波の自然 1 巻 1 号にのせられたのが同属のものが日本に知られた最初であった。しかし第二次世界大戦の最中であったため標本は失われてしまった。

昭和 25 年 7 月中旬に篠原勇氏が徳島県那賀郡沢谷村小灰の石灰岩地で化石採集中、多数採集されたものについて赤沢時之氏が *Gladiocharis abei* として正常な発表を本誌 25 巻になされ、本属 2 種目で日本特産のタヌキノショクダイが出現し本邦フロラに一大光彩をそえた。しかしその後わが国の他の地方に同種の発見の報は聞いていない。

一昨年以來、南九州に本属のものと思われる 2 種が出現したので、その生育地の生態環境等について連報し、同じような条件の西南日本にはまだまだこの仲間の珍種の出現が期待されるので同好の士に探索をお願いする次第である。

1. タヌキノショクダイ宮崎県に発見さる。1971 年 7 月 4 日、花房憲正氏が宮崎県都城市御池、霧島国有林第 23 林班 (海拔約 300 m) で陸産貝採集中 シーイヌノキ林中で落葉をかきわけている時に発見し、宮崎大学農学部 平田正一教授に同定を求め、タヌキノショクダイと同定を受けた。更に 1972 年 7 月 2 日現地を調査して約 4 アールの範囲に 3 ヶ所 17 本が落葉に埋れて自生しているのを確認し、更に 14~15 本の幼植物を菌根上に確認した。徳島県の産地がいづれも石灰岩地であるのに対し、本地域は火山岩地域で現地は西方に面し 14~16° の傾斜した斜面で、イヌノキが最も多く、ナラガシワ、ウラジロガシ、シキミ、ツガ、サカキ、カエデ等の林で全く落葉にうもれて生えていて地上に姿を現していない。土壤条件は地表より約 1 cm 落葉が堆積し、その下約 3 cm は落葉がかなり分解が進み、その下は黒ボクからなる。

1972 年 7 月 2 日 13 時 30 分の測定では自生地の湿度 93~94%、照度 200 lux であった。花期は 6 月下旬から 7 月中旬までのようで、現地の状況からみて広葉樹の落葉のかなり腐植分解の進んだところに自生するように思われる。標本は液浸にしたもの



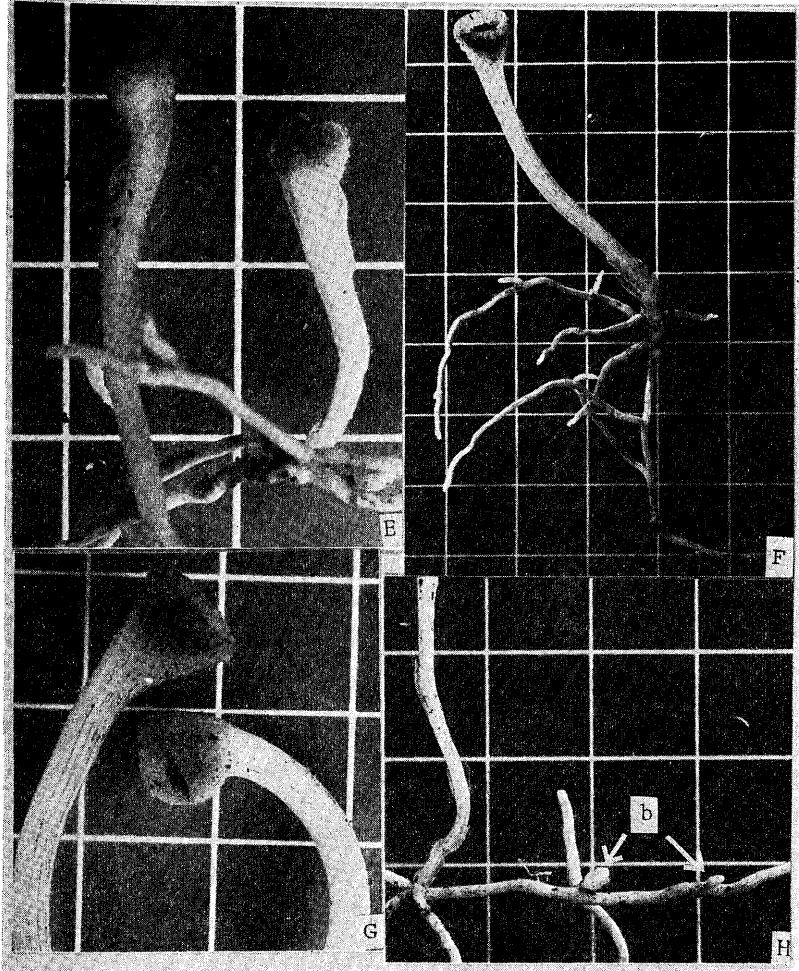


図 2. キリシマタヌキノショクダイ. E は花被の脱落したもの. F, G は果実.
H は地下茎. b: 芽. 方眼の 1 目盛は 1 cm.

が平田教授の所に 2 本, 花房氏の所に 2 本, 筆者の所に 1 本保存している (写真 A)。

2. タヌキノショクダイ属の別種 鹿児島県に発見さる。タヌキノショクダイが宮崎県に発見された報に接し, 鹿児島県にも発見が期待されていた。植物の熱心な採集家

図 1. A. 宮崎県で発見されたタヌキノショクダイ. B-D. 鹿児島県で発見されたキリシマタヌキノショクダイ. B は全形. C, D は花被部の拡大. 方眼の 1 目盛は 1 cm.

で、サクラジマハナヤスリ、マキヒレシダ、キユウシユウイノデの発見者で現鹿児島市立美術館長の川村純次氏が 1972 年 9 月 17 日霧島神宮裏山でタスキノショクダイの仲間を発見され、1 週間たった 9 月 24 日鹿大農学部田静雄講師、鹿児島短大の大野照好助教授と川村氏と同行し同じ所で数本を採集された。筆者も 10 月 26 日川村氏と同行、現地をたづねたがすでに花期を過ぎ果実となったものを 5 本採集した。川村氏が前に採集された標本全部を筆者に贈呈されたのでしらべてみると写真 B, C, D に見られる如く花被片の先端の線形の附属体がタスキノショクダイよりはるかに長く、内外花被片とも外側に多数の微小突起をそなえ、植物体も全体的に大きく、花被上部及び線形の長い附属体の下部は淡褐色を帯びている。また花期が前者は 6~7 月であるのに本種は 9 月から 10 月である。以上の諸点から見て新しい別種と考えられるが採集された完全な花の個体数が少ないので解剖は 1973 年度多数の個体を採集してからにしたいので和名だけを一応キリシマタスキノショクダイとしておく。正式の発表はすでに迫氏が標本の一部を琉球大学の初島住彦博士に送っているので琉球列島の他のヒナノシャクジョウ科のものと一緒に発表されるであろう。

地下茎も長さ数 cm から 10 数 cm に伸び分岐点には翌年の芽をそなえている (写真 H の b) ことから多年生であることもわかる。

現地は鹿児島県始良郡霧島町の霧島神宮裏山、海拔 520 m の火山岩地域で、土壌条件は表面から 1~2 cm 位は落葉がつもり、その下 3~4 cm は落葉の分解がかなり進んでおりその下は黒ボクとなっている。広さ約 1a のごくせまい範囲内で、アカガン、アオガン、イチイガン等の常緑広葉樹林で落葉が積った、ゆるやかな傾斜地で腐植土の深い所で下草もあまり生えないような薄暗い所で落葉にうもれていて全く姿を現していないので、静かに落葉をかきわけなければ発見出来ない。菌根や茎葉の大部分は腐植土の中にある。恐らく今後注意深く同じような環境の所をさがせば西南日本の房総半島、紀州、土佐、日向、薩摩、大隅から琉球にかけて面白い別種が出てくるのではなかろうか。種子の散布の方法も落葉の中なので蟻などによる外は考えられず、種子の散布範囲は非常に限定されていると考えられる。

文 献

- 阿部近一 1968. 奇怪なる植物. 阿波の自然. 1: 1. 本田正次・津山 尚 1948.
阿部近一氏発見の奇怪なる植物. 植研. 22: 27-29. 赤沢時之 1950. 日本産 *Gla-*
giocharis の一新種について. 植研. 25: 193-196. 阿部近一 1950. タスキノショ
クダイの生活環境. 植研. 25: 197-199. (鹿児島大学教養部生物学教室)